

少女のねだん。



R18

成人向け

薄暗い地下室に二人の少女が並べられていた。
狭い地下室の中央にベッドが置かれ、
沢山の男達が少女達を眺めている。
通学途中に誘拐されたのだから、
制服姿のままの二人の少女は
怯えた表情を浮かべ、涙を蓄えていた。

「いやあっ！家に帰してえっ！」
金髪の少女が叫ぶ。

「うっ…。」

もう一人の茶髪の少女は
恐怖のあまり声も出ない様子だ。

ここは少女達を誘拐し、商品として
秘密裏に売りに出す市場。
そんな場所に拉致された少女達を
待っているのは絶望だけだった。

「右が芽衣、左が彩華と言います。」

「年は十三と十四、両方現役の〇学生です。」

男が買いに来た客に説明をしている。

彼女達はこれからオークションにかけられ、
競り落とした男の所有物にされる。

彼女達はただの商品として、
買い手が付くのを待つしか無いのであった…。



とある場末の違法な売春宿のオーナーに落札された彩華。口枷を装着され、足を広げる格好で床に転がされていた。ここは買い取った少女達に強制的に売春をさせ、利益を上げている所のようなのだ。羞恥と絶望に染まる彩華のまだ幼い身体を数人の男達が舐め回す様に眺めている。



「とりあえず客前に出せるようにしっかり馴けておけよ。」
オーナーの男が冷たく言い放つ。
怯えきった表情で首を力なく横に振る彩華だったが
彼女の絶望はまだ始まったばかりだった。

早速検品と言う名の調教が始まった。
抵抗する間もなく、
始めて見る男性器を咥え込まれる。
「しっかり根元まで咥えろよ。」
「もし客相手に出来なかったら承知しないで。」
男にそう命令され、恐怖感からか
必死に男根を咥え込む彩華。

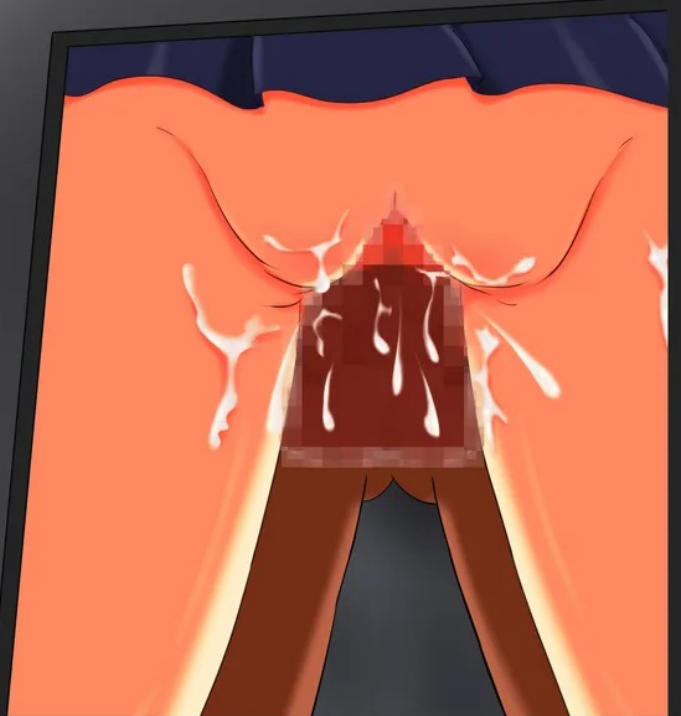
「んっ…んっ…。」
少女の口には大きすぎる凶悪な男根を咥えこみ、
嫌悪感に顔を歪めながら、
彩華は必死に男に奉仕するしかないのであった。

「オラッ！出すから残さず飲めよ！」
「溢したら承知しねえからなっ！」
頭を押さえ付けられ口内に大量に射精される彩華。
「んっ…んっ…！」
初めて味わう精液の味に
むせ返りそうになりながらも
少女は必死に咽を鳴らす。

それから数時間、調教師達によって
何度も何度も口内に精を吐き出され
少女の小さな口は精液で汚されていくのであった…。

「いやあっ！痛い、痛いのおっ！」
薄暗い調教部屋の中に少女の悲鳴が響く。
口淫をたっぷり仕込まれた後、彼女を待っていたのは更なる苦痛だった。
痛みに泣き叫ぶ彼女だが、その程度で許される事はない。
数時間前まで処女だったはずの秘所には
少女には不釣り合いなサイズの男根が突き立てられ、
犯され始めすでに数時間が経過しようとしていた。
少女の膣壁は凶悪な男性器によって限界まで押し広げられ、
その苦痛に彼女の顔が歪む。

「も…お願い…許して下さい…。」
「限界なのお…抜いてえ…。」
必死に懇願する彼女だったが、
その願いが調教師達に
聞き入れられる事はないだろう。



客の相手が出来るように一日中、限界を超えた調教が行われた彩華だったが、
独房に連れて来られた後も更なる過酷な責めが待っていた。
拘束され、秘所とアナルには玩具が挿入され、
さらに成長途中の乳首にはクリップが挟まれた。
秘所や敏感な乳首を責める苦痛に彩華は叫び声を上げ続ける。



「お願い……これ抜いてえっ……」
「おっぱいも痛いよお……。」
少女の大切な場所を責め続けられ、
一人むなしく叫び続ける彩華だったが、
その声は誰も居ない独房に虚しく響いていた……。

翌日、早速客を取らされる事になった彩華は薄暗い廊下を連行されていた。両手を拘束され、首輪にリードを繋がれた彼女は泣き叫び許しを請う。
「いやああ！もうお願いだから酷い事しないでえ！」
もちろん、許される事は無いだろうが、叫ばずにはいられないのだろう。
「客が待ってるんだ、早くしろ！」
リードを曳く男が言い放つ。
「嫌なおっ、もう本当に許してえ！」
必死に抵抗する彼女だったが、
抵抗も虚しく、連行されていくのであった。





ベッドルームに淫猥な水音と彩華の悲鳴が響き渡っていた。
「痛い痛い痛いつ！抜いてえ！抜いてよおっ！」
つい先日、純潔が破られたばかりの彼女の秘所は
一人の男性客によって既に何度も犯されていた。
男根が彼女の膣壁を擦る度に、彼女の口から悲鳴が上がる。
「ひぎい！許してえっ！」
男性客の激しい責めに、ただの道具として使用される絶望に
彼女はひたすら耐えるしかないのであった…。

また別の日、今度は複数の客に
輪姦される彩華の姿があった。
口と秘所に同時に男根を突き立てられ、
許しを請うことも出来なくなった彼女は
目に涙の涙を浮かべながら
ただの道具として、
客達に犯され続けるしかなかった。

「いやあ…そこは…やめてえ…。」
更に男たちによって上下の穴を犯され、
彩華が弱々しく声をあげる。
既に数時間にもわたり輪姦され、
更に同時に二穴を犯される苦痛に
弱々しく抵抗する彼女だったが、
そんな彼女に同情する者はここには居ない。

深夜遅く、客達が帰った後、ベッドルームに使用済の彩華が放置されていた。
彼女の全身は精液で汚され、一日中客達に輪姦された悲しき少女の姿があった。
ベッドルームに入ってきた男が冷たく言う
「明日からもしっかり客の相手をして稼ぐんだぞ。」
その言葉を聞いた少女の瞳に絶望が宿る。

「……もう……やめて……。」
「……んなの……いやあ……。」
彼女は涙を流しながら小さく呟く
だが明日も明後日も、永遠に、
彼女に待っているのは絶望だけだろう。
ただの性処理の道具として……。

一方こちらは金持ちの主人の屋敷に落札されたいらしい芽衣。
檻に入れられ、芽衣は過酷な拘束に喘いでいた。
口枷をはめられた芽衣の口から苦しそうな声上がる。
この主人は少女をいたぶるのが趣味のようなので
彼女を待つ本当の絶望はこれからだろう。





「いやあ！やめてやめてえー！」
拘束台に拘束された芽衣が悲鳴を上げる。
その後、屋敷の一室に連れて来られた芽衣は
一糸纏わぬ姿で拘束された。
そして歪んだ性癖を持った主人によって
乳首とクリトリスにピアスが装着されていたのだ。

「ひぎい！痛いよお！やめてくださいい…。」
少女にとって大切な部分にピアスが打たれ、
少女がその苦痛に絶叫するが、
その悲鳴すらも、「この主人の
歪みきった欲望を加速させるだけだった。」

翌日、屋敷の一室にて開脚され、天井から吊るされる芽衣がいた。「いやあ…見ないでください…。」初めて男性に秘所をじつくりと、それも開脚された状態で見られ、芽衣が弱々しく懇願する。幼い乳首や肉芽には昨日打たれたピアスが光り、少女の羞恥心を否応なしに煽っていた。「もう…やめてください…。」「なんで私がこんな事されるの…。」芽衣に出来るのは羞恥に顔を染めながら、許しを請うただけだった…。

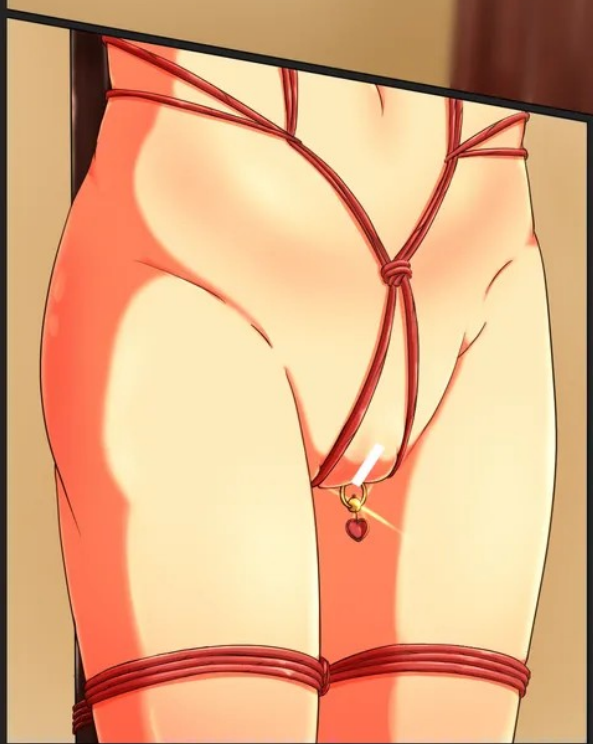


「いや、いやですっ…」
「そんなの入らないよおっ！」
その後床に拘束された芽衣が
主人の行為に必死に抵抗していた。

芽衣は今まさに玩具によって
処女を奪われようとしているのだった。
「だめえ！ほんとにだめなのっ！」
必死に懇願する彼女だったが、
濡れてもいない少女の純潔の秘所に
無慈悲にも、玩具は突き込まれたのだった。

「いぎい……！抜いてえ！」
玩具によって少女の秘裂は
無理やりに限界まで広げられ、
つい先ほどまで処女だった
彼女の秘所には、
その幼い身体に不釣り合いな
凶悪なサイズの玩具が
挿入されている。
彼女はただ、破瓜の痛みと絶望に
耐える他はなかった。

また別の日、屋敷の一室にて亀甲縛りで拘束され
放置された芽衣の姿があった。
赤い縄が彼女の身体に喰い込み、未発達な身体を締め付ける。
ピアスにはハート型の錘が装着されている。
股には二本の縄が通され、彼女の秘所を強調していた。
こうして彼女は「この状態のまま数時間、
次に行われるであろう責めへの恐怖と
羞恥心とを抱いていたのであった。」



「いやあああ！引つ張らないでえー！」
さらに数時間後、股縄渡りをさせられている芽衣がいた。
乳首のピアスと首輪のリードを引つ張られ、
本人の意思と関係なく秘裂を縄の結び目が擦る、その度芽衣が悲鳴を上げる。
「いや、いやなのっ…もうやめてくださいっ！」
それでも前に進まなければ乳首を引つ張るピアスが痛むので前に進む他ない。

縄の結び目が卑劣を擦り上げる嫌悪感に
芽衣の幼い身体が反応する。
「いや…はあっ…あんっ…」
だがそんな彼女の意思とは裏腹に、
彼女の後ろの縄は雫で光っていたのであった…。



股縄渡りの後、天井から吊るされた芽衣、
ピアスにそれぞれ錘を吊るされ、
過酷な状態での吊責めだった。
「いやあああ！降ろしてえっ！」
彼女が苦痛から逃れようと暴れる度、
ピアスに取り付けられた錘が揺れ、
更に少女の敏感な場所に激痛が走る。

「ひぎい！痛いのお！許してえー！」
乳首や肉芽を襲う痛みに少女は悶える。
が、悶えれば悶えるほど
少女を吊り下げている真紅の縄は
その幼く柔らかい身体に容赦なく喰い込み、
彼女の苦痛が増えるだけだった。



「いぎいっ…いたい…。」

吊責めが終わった後も更なる苦痛が少女を待っていた。

三角木馬の上に身動きが取れないように拘束された芽衣は

こうして数時間、一人で激痛と戦っていた。

この主人は彼女を三角木馬に乗せた後、どこかに出かけてしまい、

少女はたった一人で、いつ終わるとも知れない苦痛に身を委ねるしかなかった。

「お股が…裂ける…よお…。」

「なんで…私が…こんな酷い事…されるのぉ…」

乳首や秘裂を襲う激痛に気絶することも出来ず、

少女の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちるが

その涙を見るものは誰もいない。

少女はもう屋敷の主人の所有物、

ただの主人の性欲を満たす為の道具なのだから。



：それから一年後、毎日のように客達に犯され続けた彩華は誰の子かわからない子を身籠っていた。妊娠が発覚してからも連日のように客前に出されていた彼女だったがさすがに腹が膨らみ、客の相手が出来なくなったのでこつして監禁用の部屋に吊るされているようだ。

「それにしてもこいつ、どうします？このままじゃ使えないですよ。」

「女が産まれたら、そいつもまた犯せばいいだろう。男だったら..。」

「まあ、それそうですね。」

「あ...あ...いや...それは...やめてえ...。」

男達の非情な会話に絶望する彩華だったが、ただの所有物である彼女の声を聞く者など当然この場所には一人も居なかった..。



一方屋敷のオーナーに買われた芽衣は
四つん這いのまま屋敷内を連れ回されていた。
売られてきた一年前は純潔だったであろう秘所やアナルは
この主人によってすっかり拡張されてしまい、
巨大な玩具を違和感なく飲み込むまでに調教されていた。
「もう...やめてください...。」「
「おうちに帰して...ください...。」「
少女は涙ながらにそう呟くが、
その願いが聞き入れられる事はきっと、永遠に無いだろう。

終



























